たある夜は歓送会の夕食会に毛利邸に招かれ、名物のおそばを美味しく御馳走になり、記念撮影に記念品まで戴き、郷土のお話で和やかな夜を過し、感謝しながら宿舎の希望荘に引きあげホッと胸をなでおろした。

その後も十数年間、修学旅行の都度歓待を受けたそうで、旧佐伯藩主としての目に見えぬ繋りが、お互いの心の底にあるのではないだろうか。その後五人のお嬢さんは、近衛公爵家、黒田子爵家等々にそれぞれお輿入れになられた。

あの日より幾十星霜、今静かに過ぎし日々に思いを馳せる時、余りにも遠く、二度と再現できない故郷のことどもを、声の限りに呼んでみたい。

「オ〜〜〜

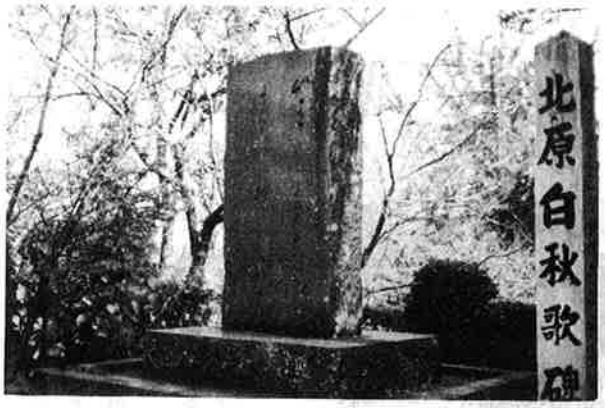
いが、定説にいたっていないという。

昭和九年に国指定となっている。

この閑静な石仏の境内に、はからずも興謝野晶子の歌碑が建っていた。晶子も石仏の姿に魅せられたのであろう。

犬飼の山の石仏　龕さえも
共に染みたり淡き朱の色

昭和六年十月二日作



北原白秋の歌碑

少林寺　北原白秋の歌碑

大分市木の上の山麓に千歳山少林禅刹を尋ねた。

境内は閑静で、庭園は禅寺特有の雅趣がある。明和二年建立の本堂や庫裡、山門が建つ。特に石組の鐘楼は石の温かい魅力を活かして姿が美しい。

藩主細川公が参勤交代の際必ず立寄ったといわれる。

庭の一隅に北原白秋の歌碑が建てられていた。少林寺の先代ご母堂と白秋の奥方と同窓で、白秋夫妻が立寄られた際詠んだ歌と聞く。

山かげのここのみ寺のかえるでは
ただあをあをし松にまじりて

（三六頁よりつづく）

まとめにかえて

蛇崎庄屋文書のうちから「奉願口上書」（二九通）だけを取り上げ、その内容を紹介してきた。この僅かな文書の中から江戸時代末頃の農村生活の一面がうかがえる。

毎日朝早くから夜遅くまで働きづめの生活をしている農村の人達が、伊勢参宮・肥後清正公詣等各地区へ出かけていることを知る時、人間としての生活を求める息吹きを感じさせてくれる。木挽職・大工職等への就業願いでは、蛇崎村の人たちのバイタリティがにおう。

これを受け次回は「覚」を中心に紹介し、更に当時の生活の核心に迫っていきたい。

（つ　づ　く）